
サナギは生まれるユメを見る

沙堂 瑠々亞

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

サナギは生まれるユメを見る

【Nコード】

N8525A

【作者名】

沙堂 瑠々亞

【あらすじ】

ぼくらはエゴから創造された。蛹は無心に蝶になった。シュレーディングアの猫は推論だらけ、なのに彼女は持論で種をせびりにやってくる。

サナギは生まれるユメを見る

(前書き)

この広大な檻に放り出された、エゴの代償の者たちへ 捧ぐ

サナギは生まれるユメを見る

その夜は 炎夏に戻ったかのような蒸し暑い雨が降っていた。

「種をくれない？」

怪談話だったらまだよかった。ピンポンとインターホンが鳴って、名前を聞いてみたら大層懐かしい名前で、どうしたものかトドアを開けたら、ずぶ濡れの相手が挨拶もなしにこう言った。

「……ええと？」

そりゃ大いに戸惑うだろう。聞き間違いとでも勧誘とでも思うだろう。

「なによ、飲み込み遅いわね。一肌脱ぎなさいって頼んでるのよ、言葉通りに」

ぼくの家に、天上天下唯我独尊の里佳子がやってきた。

サナギは生まれるユメを見る

「親がうるさいの。女に学問は必要ないって、時代錯誤の考えしてる人だから。まあ 結婚は煩わしいけど、子供は育ててみたいなって考えてたりはするわよ。だけど どの誰だかわからない種、写真と書類で選んで機関でもらったって、お金もかかるし保証もないわけ。だったら誰だか分かって 勝手知ってた過去の人間に貰うのが理想かなって思うの、当然でしょ？」

「はあ。それでぼくの家に押しかけてきたわけですか」

和室に招き入れると、彼女はぼくの出した炭酸水を一気に飲んでから滑舌よく喋った。

原稿を書き上げて、担当に渡してきた夜だった。平日の飯時、過

去の男の家にアポなしで押しかけてくる人間なんて、彼女くらいのものだろう。

「だけど 付き合った男なら他にも居るだろう？ 君の研究機関の人間とかはどうなんだい」

「あら、あなた以外にわたしとIQ張り合える人なんていないもの」
自信家で実直（ひとえに自己主義で無鉄砲）の里佳子は さらりとそんなことを言う。

「わたしも現況でそんな大きなプロジェクト入ってないし、もし入ったとしても来年だから。身体も今週あたりうまい具合に根付けそうだし、時期でいっいたら今夜がベストなのよ」

「……さいですか」

呆れて物も言えない。大学時代から里佳子はこうだった。自身の能力をもって自任しているとは聞こえがいいが、実際は我が街道を行く向こう見ずなだけだ。六年制大学を首席で卒業して、一流研究機関に勤めているといっても、その独自の理論で動いているのは変わりないらしい。

「それより こないだ載ってたわよー？ 今をときめく個性派エツ

セイスト、『曹豹 慶達』さんの新連載」

「ああ、あれ」

「すつつごくふざけた作家名だなんて思ったわ」

「……」

一瞬でも 里佳子に感想をもらえると思ったばくがばかだった。

「三国志でこんなマイナーな人物選ぶのやめなさいよ。曹をつけたのなら曹操でしょ」

ふざけた名前と言いつつ、ぼくのペンネームの出所まで知っている。やっぱり彼女は侮れない。

そもそも この畳の部屋に里佳子が居るなんて不思議だった。ずぶ濡れたのがそのまま入ってきたせいで、畳の藺草の馨と 雨の香が入り混じっている。秋も近いというのに 夏に厭というほど嗅いだ、草いきれの匂いがした。

否、草いきれのむんとした熱気とはまた違う。もつと水を含んでいて、風に乗って流れる大気の匂いだ。

その匂いを何処で嗅いだのか。ふと気になって、記憶の糸を辿ろうとした矢先。

タオルで水気を拭き取っていた里佳子が、「まったくあなたは」と脈絡もなく転じた。

「わたしと同じ学部だったのに、なんでまた文系の道突き進んだわけ？ あなたと組めたら、わたしの所は さぞかしい成果が期待できたでしょうね」

「……はは」

空笑いをする。研究機関と大学院のオファーを蹴って 大学卒業後あっさりバイト生活に切り替えたばかりのことを、里佳子は見損なつたと言つて罵つたものだ。

「結果論だよ。あの世界じゃ渡り歩けないと思つたからやめたんだ。無理して行つてたら、ぼくは落胆されるだけで終わっていたよ」

「謙遜は皮肉と紙一重」

柔い答えを、里佳子の棘で切り返される。目鼻立ちのはつきりした顔が、キツとぼくを睨み付けていた。

「その余裕と日和見主義が好きじゃないわ。むかつくから罰としてビールでも持つてくること」

性格を否定された上に、ビールを要請された。というか、威令だった。

「……どう見ても頼みにきた態度じゃない。」

「あっそうだ、お風呂貸してくれる？ 入ってる間に つまみとお酒と身体の用意、頼むわよ」

ムードもへつたくれもありやしなない声とともに、里佳子は風呂場へ駆けていった。

「サナギ！」

いが流れてきた。

「……なんのために飛び立つのかなんて、知らないんだろうな。蛹は」

感覚的でメランコリックな発言は、腕のなかの里佳子に笑われてしまう。

「また空想チックな発言するんだから。あんまり言つとモテなくなるわよ」

『彼女』になっている君が云うのもどうかと思う。後々面倒になるので、諭さないでおくけれど。

「哲学と言ってくれよ。……ぼくらだってなんのために生まれるのか解らないだろう?」

「与えられた細胞が活性化して分化して劣化して老化するから」「ユメがないなあ……」

「だって、わたしたちは誰かのエゴで生まれたんだもの」「ざあっと、一陣の風が吹いた。

水気を帯びた草木の匂いが、ぼくのそばを通り過ぎていく。里佳子の声が凜と響き渡る。きっぱりとした物言いは、諦観して

いるようでも、吹っ切っているようでもあった。ぼくは言葉を失った。彼女を腕の中に入れたまま、なにも言えなかった。

なにかが決定的にぼくらを別つているような気がした。幾度となく軀を重ねても、言葉を交わしても、心を合わせられない理由。気付いてしまった。里佳子はぼくと違う。彼女は聡明過ぎるのだ。聡いばかりに、この世の理をとらえてしまっているのだ。

震えるぼくの腕を、彼女は ひんやりした手でそつと振り払った。「なのに、自分のエゴイズムで個体を創造る生き物なのよ。」

ぼくら生きているものはエゴでつくられた。

その尊さを、かなしさを、わびしさを知っているはずなのに、ぼくらは自分のエゴイズムから創造する。

創造された個体は、自我を持つ。意識は断絶され、疎通ができなくなる。

せめてぼくが蛹だったら、生きていることになんの疑問も持たなかったのに。

ただ葉を食べて肥えて、蛹になって、羽を広げて子孫を残すサイクルに身を任せていけたのに。

ぼくらは どうして相手に楔を打つことでしか、証しを残せないんだろう。

「……不幸だと思うかしら。 自我を持ったら、わたしを恨むかしら」

閉め忘れた障子から、朝焼けの光が差してきた。机にはビールの缶が散らばっている。簡単に作ったつまみは全部空け皿のまま放置されている。畳に敷かれたタオルケットの上で、里佳子はぼくの隣で呟いた。

なぜ里佳子が背中合わせで隣に居るのか、ぼくは一瞬 混乱してしまう。

そして昨夜 押し掛けられたことに始まり、飲み比べから愚痴り合いに発展し、煽られその後のやりとりとりに及んだこと 気抜けしていた頭が、徐々に覚醒していった。

朝になって里佳子の話を聞いているうちに ぼくはまたうとうととしてしまったらしい。

「当然よね。意思も聞かずに放り出そうとしてるんだもの」

今まで話していたことを思い出す。里佳子はこれからの不安を少しだけ吐露していた。勝気な彼女が本音を吐くのは、いつもこんな朝方だ。

「いいや。そう思わないよ」

目を瞑って答える。草いきれの余薫はもうない。蒸れた肌の馨と、蘭草の匂いが立ち込めているだけだった。

「ぼくらは望んでふたりで居た。付き合っていた期間だったとしても、いま居る間だけでも、それだけは本当だった。自我を持つのなら、いずれ解つてくれると思うんだ」

そう思うことこそ、エゴにしか過ぎないのかも知れないけれど。

心のなかで里佳子に呼びかけてみる。

いつの間にか夢を見ていたんだ　　大学時代に、ふたりで居た夢を。

「うーんと、そうだなあ……シユレーディングの猫みたいなものだよ。箱を開けてみないと猫の生死は解らない。開けるまで『あらゆる可能性が不確定』で、開けた瞬間にひとつの状態に収束する」「不確定性原理にすりかわってるわよ。だいたい、それじゃ確率解のパラドックスじゃない」

「茶々は入れない。だから、きつと　悲観的に考えるのは、まだ早いよ」

君は聡明だった。凜としていて、勝気で、気まぐれで、無鉄砲で、それでも何処か寂しそうだった。

ぼくが君のすべてを受け入れていたら。あのとき　世界に叛いた君の精一杯の呼び声に同意していたら。生まれてくる存在を、別の形で祝福していた。気休めにしかならない偽善の言葉で、君を安心させることなどしなかった。

それでも願わずにはいられない。エゴで生まれゆく個体の行く末を。

願わずにいられない。聡い彼女の血を受け継ぐ個体が、世界の理を見てしまわないように。

「本当に生まれたら、ぼくのところに見せにおいて。自我が出るころになったら、赤ん坊の頃に別れたと言えればいい。そうすれば少しは理由がつかだらう？」

反対側を向いていた里佳子が、ぱつとこちらに顔を向けた。呆気に取られている。間の抜けた表情を見るなんて久しぶりだ。少しだけ愉快になった。

「優しい人ね。わたしは靡かなくせに甘えてしまおう人間よ。知ってて言ってるの」

「…ああ」天井を仰いだまま、ぼくは噛み締めるように言った。「君がどういう人間か、ぼくは知ってるつもりだよ。」

天井の梁に炎の眩耀が映っていた。

ステンドグラスを透過した赤い光。もしくは、スペクトルが並んだ円弧状の集合体のように。水滴がプリズムと同じ屈折作用をして現れる七色の帯…それを見て向こうがわに憧れる少女の話は、なにかの歌詞だったか、物語だったか。

いや、もう考えるのはよそう。箱を開けるのは今じゃない。

外はそのうち鳥が飛び回り、虫が騒ぎ出すようになる。秋に移行するまでの夏空の最後の足掻き。熱を持った一日の始まりだ。

「ありがとう。恩に着るわ…… 佐柳君」

彼女のなかで育つサナギは、どんな夢を見るのだろうか。

ぼくらのエゴで生まれた個体は、どんな風の世界を見るのだろうか。彼女は強い。だから、生まれてくるその子も、強く育つとぼくは信じている。

なにかに絶望しても、苦悩しても、きつと かぎりあるものの意味を知ってくれれば、信じている。

(後書き)

エゴでぼくらは創造する。猫は箱のなかで死ぬ。まだ見ぬきみは
水面の向こうがわへ行ける日を待っている。

きつと蛹は、蝶の姿を知らずに眠る。

サナギは生まれるユメを見る

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8525a/>

サナギは生まれるユメを見る

2009年6月16日15時47分発行